

OPINION

中部経済新聞

8月20日から横浜で第9回
アフリカ開発会議(TICA
D9)が開催される。当初か
ら、アフリカ諸国の「自助努
力(オーナーシップ)」や国
際社会の開発パートナーとし
ての「パートナーシップ」を
提唱する重要な会議だ。20世

ナヒゲーター

紀末以降、アフリカが新たな
時代に入っていることは明ら
かである。アフリカは魅力あ
る市場であるばかりか、各種
の優秀な人材提供源であるこ
とを、われわれは既によく理
解している。

先週アルジェリアからの報
告を紹介したが、少しまとめ

日本への期待
世界各地から

其
140

日本の知恵を移転する

てアフリカの現状をお伝えし
たい。リーム中産連は、5年
前まで3年半同僚コンサルタ
ントをタンザニアに派遣し、
同国の生産性向上の支援にあ
たった。一昨年までは3年間
アフリカ経営者に対して、遠
隔および来日研修を担当し
た。アフリカの多くの国で日
本発のカイゼン思想が普及し
たり、国連の主要機関がケニ
アに移るといふ話も聞く。

アフリカとのパートナーシップ

業製品を中心とした製造業中
心の成長を経済成長とイメー
ジしがちだが、アフリカの主
要産品は農産品を中心としつ
つも、IT・ソフト開発に主
力が移っている。アフリカの
皆さんと接することで、彼ら
が主体となっている開発・成
長の足跡がはつきり理解でき
る。

各国には、その国固有の歴
史や風土、考え方があり、日
本モデルがそのまま根付くこ
とはない。自国の開発を自国
の知恵や力で達成する必要が
ある。これに合わせた独自の
対応で成長の手伝いをするの
が既に発展した「先進国」の
役割だといえる。

日本製品の市場、または人
材供給源としてだけ見るよう
では、アフリカをよく理解し
ていないことになる。アフリ
カはアフリカ流で成長過程に
ある。「もったいない」を世
界に発信したのは、ケニアの
環境保護活動家ワンガリ・マ
ータイである(2004年ノ
ーベル平和賞を環境分野で初
人が長期間かけて培ってきた

に発信したのは、アフリカ人
であったのだ。

このように、アフリカと日
本とは共に助け合う「共助」
の関係である。アフリカが必
要とするのは財政的支援以上
に、日本的な知恵ではないの
か。日本は軍事的支援など
なく、民間主体による知恵の
支援を徹底するべきだろう。

筆者の経験では、アフリカ
人もプロセスを見ずに、結果
を追求しがちである。現状把
握し、原因追究し、対策を講
ずるような現状変革の考え方
のような関係構築こそ支援目
標としたい。

【リーム中産連企画営業主
幹 濱崎健】

(月曜日に掲載)